

19) 幻の日本歯科大学九段短期大学

Visional Kudan Junior College of the
Nippon Dental College

医の博物館 中原 泉

Sen Nakahara, Museum of Medicine & Dentistry

戸沢ら (1992) は、第2次大戦後の混乱期に計画された幻の“東京歯科大学市川短期大学”の構想について報告した。

それと機を同じくして、日本歯科大学では昭和24年(1949)に、“日本歯科大学九段短期大学”の設立計画をすすめた。この短期大学設置認可申請書は、財団法人理事長名により同年10月15日付で文部省に提出された。この提出の日付は、東京歯科大学市川短期大学の申請と同年同月同日であった。

日本歯科大学九段短期大学も幻に終わったが、この申請書を中心に計画の目的と全容について明らかにする。

20) 第13回日本医学会総会について(その1)

The 13th Japan Medical Congress (Patr 1)

日本大学松戸歯学部 ○渋谷 鉦
山口 秀紀
渋谷 幸男
谷津 三雄

Koh Shibutani, Hidenori Yamaguchi, Yukio Shibutani and Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

演者らは日本医学会会誌を資料とし、日本医学会における歯科学、口腔科学、医史学および麻酔学について逐次報告してきた。

今回は、第13回日本医学会総会号(昭和26年3月15日発行)と第13回日本医学会会誌(昭和27年6月1日発行)とを対比しながら、その概要について報告する。

第13回日本医学会総会号は表紙に、第13回日本医学会総会のシンボルマーク、東京、昭和26年

(1951)と記されている。18×25.5 cm大、全284ページ、昭和26年3月5日印刷、昭和26年3月15日発行、編集発行人 内村祐之、印刷人 向喜久雄、印刷所 杏林舎、発行所 日本医学会、非売品でその内容から事前抄録集ともいうべきものである。しかし、抄録は総会講演の古畑種基、吉田富三、尼子富士郎、小泉 丹らの特別講演の内容抄録だけで各分科会については講演タイトルと演者名だけである。裏表紙には「総会第一日に行幸がありますが、服装は平服で結構です」とあり、天皇陛下の臨席を賜っている。

総会日程は昭和26年4月1日～5日、会場は東京大学大講堂、会頭 田宮猛雄、副会頭 柿沼昊作、準備委員長 内村祐之、分科会は第1分科日本医史学会から第41分科日本気管食道科学会までである。本誌33～34ページには、各分科会会期と会場の記載と東大構内会場案内図があり、口腔科、医史科展示、歯科器械展示などが明示されている。

本総会号と学会終予後に編纂された第13回日本医学会誌とでは、紙質の違いが目立つほか、医学会誌には記載されていない医薬品とその会社名および医書などの宣伝広告がみられる。本誌の広告はパンビタン、塩化アドレナリン、スプラージェ、レスタミン、ビスラーゼ、メチオニン、プレスミン、ノイロトロピン、ビオフェルミン、デギラノゲンなど、現在も使用されている薬がみられる。麻酔薬は、オルトパン、イソミタールソーダ、オウロパンソーダなどの静脈麻酔薬がみられ、特にチクロパン・ナトリウムには静脈注射に依る短時間麻酔兼誘導麻酔剤と記されている。歯科器についての広告は、「待望の臼歯・愈々完成! “ヴィルックス陶歯”」而至化学工業株式会社があるだけである。医書は「光電比色計による臨床化学検査」、「日本生理学会編 生理学講座」、「日本医事新報」、「最新医学」、「救急外科学」、「化学療法の現実」、「最も新しい外科と麻酔(日米連合医学教育者協議会外科・麻酔部会記録)」、「医師国家試験予想問題と解答」などの広告がみられるが歯科に関する書はない。なお、1ページをさいて、福田エレクトロ製作会社、「エレクトロカルデオクラフ」の広告があるが今日の心電計と比較すると今昔の感が深い。

第1分科の第4回日本医史学会総会は、会長 山崎 佐で昭和26年4月2日に行われたが、特別